

氏 名 小泉 友則

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 1974 号

学位授与の日付 平成 30 年 3 月 23 日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 日本における「子どもの性」に関する認識・情報の変遷
—近世後期から明治後期にかけて子どもの性的欲望・現象は
いかに語られてきたのか—

論文審査委員 主 査 教授 山田 奨治
教授 井上 章一
准教授 CRYNS FREDERIK
准教授 赤川 学 東京大学 大学院
人文社会系研究科
教授 斎藤 光 京都精華大学
ポピュラーカルチャー学部

論文の要旨

Summary (Abstract) of doctoral thesis contents

本研究は、子どもの性、とりわけ性的欲望・現象についていかなる認識・情報が歴史的に存在し、またそれらがどのようにして識者らによって主張され、時代の変遷のなかで変容していったのかを研究対象とする。研究の中心対象とする時代は近世後期～明治後期とする。対象史料は医学・教育領域に属する史料を中心とする。

本研究でとりあげる「子ども」とは、研究対象とする各時代において、一般的に性的欲望・現象が発生しはじめるとされてきた年齢以前の、史料上で「幼い」と位置づけられている存在を指す。近世後期から明治期にかけて、性的欲望・現象が発生しはじめる年齢というのは、「色欲」、あるいは「経水」や「精水」の発生等を指標にして「春機発動期」等の名称で歴史的規定がされてきた。

本研究では、上記のような春機発動期以前の子どもの性的欲望・現象が、いかにして語られてきたのか、ということ明らかにする。このように書くと、本研究の課題設定はやや矛盾したものとしてうつるかもしれない。しかし、春機発動期以前の子どもについても、性的欲望・現象に関する主張は歴史的に存在してきた。本研究ではそのような主張が提示されてきた歴史的意味や意義を明らかにする。また、子どもの性的欲望・現象に関する歴史的な主張を追うことにより、日本の児童観の歴史的変遷には複層的な展開があることも明らかにする。

第1章では、近世後期における教育書・医書から、子どもの性的欲望・現象についていかなる認識・情報が提示されていたのかを記述した。近世後期の教訓書・養生書・漢方医書では、子どもの性的欲望・現象の存在について着目し、具体的に論じていく態度自体が極めて希薄であった。

ただし、近世後期は蘭学を中心として欧米の医書が翻訳されていく時代でもあった。翻訳医書には、子どもの性的欲望・現象に関する、日本にある従来の見解とは異なる記述が存在した。具体的には、子ども、特に女兒が社会的環境によって早期の初経・結婚・出産を行うことがあること、また手淫が子どもによって行われていることを問題化する記述があった。洋学の流入によって、子どもに性的欲望・現象が「ある」ことが、学術的にも具体例をもって日本で語られるようになった。

第2章では、近世後期に洋学で出現し始めた子どもの性的欲望・現象についての認識・情報が、医学・教育領域で明治初中期に引き続き提示され続けていることを見た。つまり、①子どもが手淫をすること、②社会的環境によって女兒が早期の初経・早婚・早期出産を迎えることがあるという主張がなされ続けていたのである。また、子どもの性的欲望・現象の発生は問題であると史料のなかでは見なされていた。それゆえ、③子どもの性的欲望・現象の発生を防ぐための、教育的方策が必要だとすることも主張されていく。これらの主張は、近世後期よりも大きな規模をもって展開されていた。

第3章以降では、上記①、②、③の個別的な主張を巡って日本でいかなる歴史的動向が見られたのかを記述した。

第3章では、子どもが手淫をすることがあるとする主張をめぐる日本の歴史的動向を記述した。子どもの手淫の問題は、時代が進むにつれ、日本人の医学者による研究対象とな

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

っていった。欧米の研究状況と比較した際に、日本での子どもの手淫研究が著しく乏しいことを意識した一部の医学者達は、日本の子どもの手淫の事例研究等を展開していくことになる。それは例えば、学会報告のレベルでも展開されていく。さらに、手淫を初めて行った年齢についての統計も取られるようになっていく。

上記のような動向と同時に、同時期の欧米で展開されていた、子どもの手淫に言及するフロイトらの最新の性科学研究も逐一輸入されていくことになる。第3章では、子どもの手淫の研究が、日本の性科学研究自体をも発展させたことを明らかにした。

第4章においては、社会的環境によって、女兒が早期の初経・早婚・早期出産を迎えることがあると主張する、女兒の性的早熟論の歴史変遷を記述した。明治初中期の医学書等においては、この女兒の性的早熟論が頻繁に見られるが、そこからは、女兒の性的早熟論のなかにある環境的要因論が複雑な理論内容を持っていることが明らかとなった。それは、女兒の性的早熟が起こる原因には、その土地の寒暖の差異・社会に氾濫する性的刺激の大小・人種の差異などが関連するとするもので、かつ初経等の発生時期が遅速のどちらかに極度に偏る場合は、当該社会は「野蛮」である、とする理論である（総合遅速理論）。

この理論をその内部に含む女兒の性的早熟論は、明治後期以降も医学領域・優生学・人類学領域で主張されていく。女兒の性的早熟論では、女兒の性的早熟現象が生じるとされる地域や人々は、理論上「野蛮」とみなされる。それを受け、医学や人類学的領域は、「野蛮」国では女兒の性的な早熟が見られると事例を挙げ学問的に他国の「野蛮」さを「証明」していった。

第4章では、自国の「先進国」としてのアイデンティティを示すためのツールとして、女兒というジェンダーが特に注目され、用いられていくさまをみることになる。「野蛮」国であることを表す指標として女兒の性的早熟という現象があり、それは、劣悪な社会環境や人種や遺伝の差異で生じることが、学術的に認められていく。その中で、日本はそのような社会に当らないことも「証明」されていった。子どもの性的欲望・現象をめぐる主張は、当時の帝国主義的・植民地主義的な主張ともリンクしていた。

第5章以降においては、子どもの性的欲望・現象の発生には教育的方策をもって制御せねばならないとする主張の変遷に着目した。この主張は、明治後期に特徴的なかたちで「性欲教育」論という教育論の中で展開された。まず、第5章では、「性欲教育」論とこれに類似する教育論がいかなる経緯で登場し、展開していったのかについて、先行研究よりも詳細な再記述を行った。

第6章では、性欲教育論のなかで展開されている、子どもの性的欲望・現象の発生には教育的方策をもって制御せねばならないとする主張の変遷を記述した。明治後期の性欲教育論では、子どもの「自分がどこから生まれたのか」という質問（誕生に関する質問）に対し、どのようにして大人は返答すればよいのかとする主張が展開された。「性欲教育」論においては、誕生に関する質問は「性欲」と関連のある問題があるものとされ、この質問を発するという性的現象を大人は返答を通じて制御していかねばならないとされていく。こうした主張は明治後期以降増大し、専門的に返答例を具体的に提示していくような専門書も登場していく。

性欲教育論等の文脈では、誕生に関する質問は子どもの「性欲」に関する現象であるとされているから、教育界においては子どもが性的欲望・現象が「ある」存在として、手淫

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

や性的早熟の問題とはまた異なる形で認識されていたのである。

以上のように、近代以降、日本において子どもは「性欲」を持つ存在として、様々な側面から主張されるようになる。こうした子どもに性欲があると見做していく現象は、幼い児童が無垢で無邪気であるとする、この現象と相反するような児童観の登場と同時期に生じていった。日本における児童観の展開は、先行研究がこれまで明らかにしてきた以上に複雑な様相を持っていたのである。

Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、近世後期から明治後期における医学・教育領域での子どもの性的欲望・現象の語られ方の分析から、子どもの性に関する言説の複層性を明らかにしたものである。明治以後の西洋からの近代的な医学・教育学的知識の流入を受けて、医学者や教育学者らの子どもの性についての認識が複雑に変遷した様態を、本論文は詳細に考察している。

序章ではまず、本論文における「子ども」を一般的に性的欲望・現象が発生する時期（春期発動期）以前と定義しつつ、その対象が時代や文献によって揺れ動くことによる研究上の困難性を示した。西洋での先駆的な研究や、日本における民俗学・風俗史・セクシュアリティ研究・性科学史・性教育史・発達心理学などの諸領域の先行研究を検討しつつ、それらが前近代を性的寛容さの時代とみなす記述に偏りがちであったことを指摘した。そのうえで、これまであまり深く研究されてこなかった、医学・教育領域の文献を対象にする必要性を論じた。

第1章では、近世後期において子どもの色情・色欲がどのように語られたかを論じた。往来物や教訓書などの教育領域の史料からは、子どもに性的な情報を与えることを忌避しながらも、子どもの性的欲望への関心が薄い様を見て取った。また、漢方の医学書でも子どもの性的欲望に触れられることはあまりないものの、性的早熟についての情報が洋学によってもたらされ、子どもに性的欲望・現象が「ある」ことが語られるようになったことを捉えた。

第2章では、明治初中期の出版物から子どもの性的欲望・現象を扱ったものを抽出して分析を加えた。そして、ジェームス・アストンの『造化機論』の影響を受けた生殖論系の書籍が登場し、子どもに性的欲望・現象が「ある」ことや手淫の害、気温の高い国に住む女兒の性的早熟などが、より学術的な装いを纏って主張されていったことを明らかにした。

第3章では、第1・2章で論じた文脈において、子どもの手淫が問題化していったことを論じた。子どもの手淫の問題は、近世後期から明治はじめに翻訳書を通して発見され、明治後期にいたって国内の医学者が研究する対象になった。そうした明治の医学研究が、子どもにも性的欲望・現象が「ある」とする言説の一部を形成していたと、本論文は主張している。

第4章では、女兒の性的早熟論に着目し、それが近代の植民地主義と呼応することを考察しており、本章が本論文の白眉ともいえる。女兒の性的早熟論とは、暖かい国では平均初潮時期が早く寒い国では遅いとする、西洋医学書によって国内に伝播した主張である。本論文では、女兒の極端な性的早熟が社会の「野蛮」「未開」状態を示す指標として認識されていったことを論じた。また、男児も含む子どもの性的早熟論と結びつけられた環境要因論を整理したうえで、寒暖・色欲・貧富・都市化・人種等の差異によって性的成熟に遅速が生じ、それに「野蛮」「未開」の価値判断を付す考え方を総称して「総合遅速理論」と名付けた。

第5章では、教育書において子どもの性的欲望・現象がどのように言及されていたのかを論じた。「性育」「性欲教育」「性教育」概念の歴史的変遷を整理したうえで、子どもの性的欲望・現象には教育的な抑制策が必要であるとの議論が主流を占めていったことを論じ

(別紙様式 3)

(Separate Form 3)

た。さらに「性教育」概念の形成は、先行研究で言われているような大正期以降ではなく、明治後期に遡ることを新聞記事の分析から明らかにした。

第6章では、「自分はどこから生まれてきたのか」という誕生に関する子どもの質問が近代になって問題化し、それが「性欲教育」と連結して展開したことを、教育書や心理学書の分析から述べた。誕生に関する質問は、子どもの性欲と関連があるとされ、その教育的な抑制策として返答法がいくつも提示され、それが規範的な知識となっていくことを論じた。

終章ではまとめとして、近代になって展開されはじめた子どもの性的欲望・現象をめぐる言説が、無垢な児童像を支える面と、そうではない面が複雑に絡み合いながら展開し、そうした主張が、他者への差別や支配関係を示すものとしても存在したことを、改めて述べた。

本論文の主要な意義は、以下の3点にある。第1に本研究は、18世紀末から20世紀初頭の約140年間にわたる子どもの性についての言説を掘り起こし、先行研究では分断されがちだった近世から近代への移行期における学知の有り様を描き出した。とりわけ、資料の性質にずれがある両時代を、等分に比較検討する視座が構えられた点は、出色であると評価する。第2に本研究は、子どもの手淫や性的早熟といった、これまではほとんど扱われてこなかった現象に光を当て、近代日本においてそれらがどのように学知に組み込まれていったかを詳細に明らかにした。第3に、子どもの性的早熟を「野蛮」「未開」の指標にしようとした種々の試みを図式化し、その植民地主義的な意図を示唆しつつ、「総合遅速理論」として提示した。以上のように、本論文が描く子どもの性をめぐる明治以後の展開は、圧倒的に新鮮である。学問史、とりわけ性に関わる認識の歴史研究に新機軸をもたらしたものとして、高く評価する。

しかしながら、本論文にも課題点は散見できる。日本の近世後期と近代前期、そして近代西洋の性認識は、意味的な差異をはらんだ用語のうえに組み立てられてきた。それらの違いを明確にしたうえでの概念整理が、こうした研究を進めるには必要である。しかし、概念の差異の処理に迷う部分があったことが、本論文の記述からわずかに読み取れる。困難な作業ではあるが、時代や論者による差異に中立的な概念の彫琢にはまだ課題を残している。また、誰がどういった状況で個々の言説を形成したのか、人物や団体の来歴や成り立ちをより丁寧に追うことも、今後の課題であろう。

以上のように、多少の難は残すものの、本論文が性認識の歴史研究に新しい成果をもたらしたことは間違いない。文献の博搜とその読み込みも、労作と評するに値する。審査委員会にて総合的に検討した結果、本論文は学位を授与するにふさわしいと、全員一致で判定した。